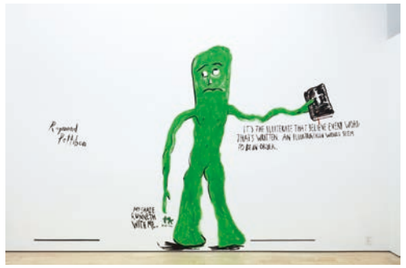
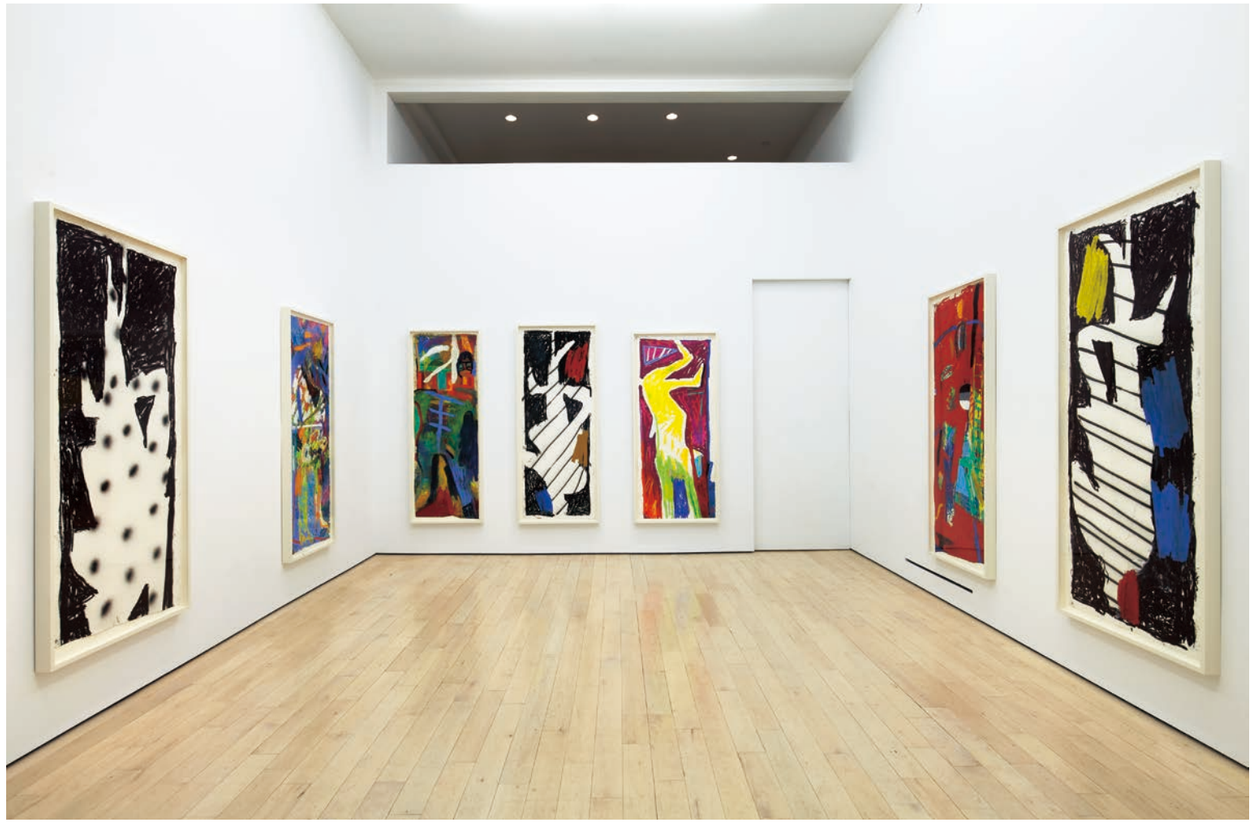


大物アーティストは アクセスしやすい作品を

ガゴジアン画廊のスター作家スペンサー・スウィーニーの珍しい水彩画展（右：各25,000ドル）と、グラフィティ感覚のドローイングで人気のレイモンド・ペティボンのミューラルとウィンドウ展示（上・左）。大物作家の場合は、水彩画など比較的安い価格帯の作品を紹介することで、コレクターにはアクセスしやすく、作家には新たな挑戦の場となっている。



The Journal Gallery

2005年イーストビレッジにオープン。ブルックリンの巨大スペースを経て、2019年トライベッカの小スペースに移転。「テニスエルボー」なる短期の企画展が評判を呼び、新旧アーティストの集いの場となっている。www.thejournalinc.com　www.thetenniselbow.org

この１年、ニューヨークの画廊シーンは一見静かだ。コロナ禍で時間予約の入場が普通となり、オープニングやアートフェアの賑わいもない。が、ある意味で、本物のアート好きの街に戻ったという声もある。

たとえば、若手の小さなギャラリーで作品がよく売れている。「僕らの仕事は結局、アーティストを中心とする共同体なんです。みなで支え合おうという気持ちがもともと強い」。こう語るのは、2年前からトライベッカにスペースを構える「ザ・ジャーナル・ギャラリー」のマイケルだ。

この画廊、実は、さまざまな点でユニークだ。まず、定期的に新作を発表する「扱い作家」たちがいるわけではない。展覧会には、いま注目の若手作家のプロジェクトもあれば、ガゴジアンら世界トップの画廊が扱う有名作家の作品も登場する。会期もまた１〜２週間と超スピーディーだ。

何よりユニークなのは、会員制の顧客管理という賢くも有効なシステムだろう。ジャーナルの会員（無料）になれば、毎回の展覧会情報や作品価格がいち早く知らされ、世界のどこからでもオンラインで購入できる。が、作品の購入後、２年間は転売してはいけないとか、過去1年に購入がない者は自動的に会員資格が失われるなどのルールがある。

それでも、世界中から毎日のように応募があり、いま現在の会員数は約550人。選考基準は、アートに対する情熱や作家サポートの心意気であり、お金持ちや有力コレクターである必要はない。ジャーナルにとって作品販売とは、アーティストと購入者との間に長く継続する関係を築いてもらうための、いわばヘルプなのだ。いや、どの画廊であれ、アートビジネスの根底には、美的センスを共有し、志を同じくする者たちの信頼関係がある。

そんなパーソナルな繋がりの中、アートを買うということは、それ自体が勇気ある決断だ。好きなもの、美しいものなど、価値判断はどうあれ、自分の感性を信じ、まだ有名ではないアーティストの小品を手に入れる。その作家が、やがて美術雑誌に載ったり、美術館のグループ展に入ったりすれば、それだけで嬉しい。自分には眼があったのだという何よりの証拠になる。

一方、「アートは究極の贅沢品。この世で１点だけのもの。いずれ値段が上がっていくという金銭的価値も期待できる。でも、アートを買うことのもう一つの意味は、ソーシャルな価値なんだ」。こう断言するのは、ジャーナルにも出入りするアート・アドバイザーの一人、ダニエル・オグランダーだ。

作品を購入し、アート界との接点ができれば、社交生活は一変する。アーティストを知り、有名コレクターとも出会い、世界のビエンナーレやアートフェアを渡り歩くことになる。すべてが刺激的で、学ぶこともいっぱいだ。でも、たとえ購入せずとも、ニューヨークの画廊は誰にでもオープンだ。小さな画廊であればあるほど、饒舌にして情熱的な、究極のアートのプロが、いつだって本物のアート好きを待っている。

Artwork images Courtesy the artists and Tennis Elbow at The Journal Gallery; Photo THOMAS MÜLLER

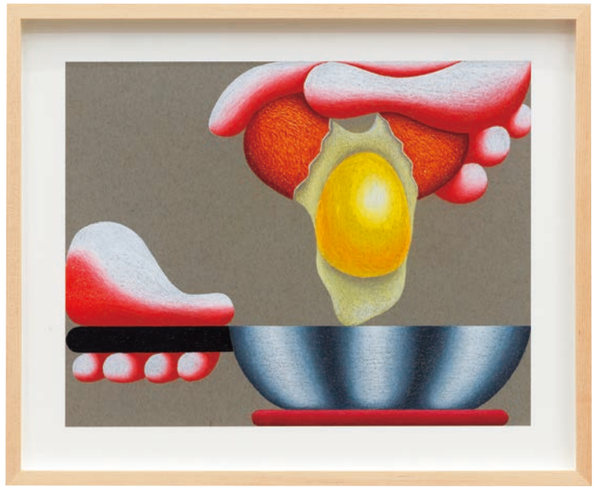
アーティストが寄稿するビジュアル系アート雑誌として2004年10月に創刊。以来、年2回の発行を目指す。

Julia Dippelhofer
ジュリア・ディッペルホファー

PROFILE

ボストン近郊の美術大学の同級生。在学中から雑誌制作を始め、2004年、二人でニューヨークへ。仏教徒の家主さんの好意でイーストビレッジに出版兼展示スペースを確保。『The Journal』出版記念のアート展で注目を集める。

Michael Levin
マイケル・レヴィン



アップカミングな作家に出合う楽しみ

この春の新作展で注目されたエレノア・スウォーディのパステル画《割ってるところ》（上）《通勤中》（左）《すすぎ中》（下）。いずれも縦横30 cm 弱と小ぶりだが、人の存在を仄めかすシュールな絵柄と豊潤な色彩が魅力的。4,500〜6,500ドルにて完売。油彩画のオークション価格は10万ドル近い。

from New York

すべてのアート好きに開かれた場へ。ニューヨークギャラリーの最新事情

オンライン展示が浸透したり、空いたテナントに無名の作家や画廊が集まるなど、コロナ禍はアート界に「ヴィレッジカルチャーの再来」と囁かれる変化と活気を生み出した。その中心にいる「ザ・ジャーナル」の2人が語る、アートとの付き合い方とは？

Realization MANAMI FUJIMORI

Galleries in TWO BRIDGES

1

見る目を養うにはたくさんのプロと話すこと

Marinaro

マリナーロ

「画廊サイトで気に入ったものがあったら、海外からでもメールして自分の興味を伝えてみること。画廊にはそれぞれ扱う作家に傾向があり、さまざまな情報が集まってくる」。こんな積極策を奨励するローレンは、アートを買う第一歩はギャラリストとの対話からと信じている。地下2階を含む3フロアのスペースでは、新進作家の個展や実験性の強いグループ展が6週間おきに登場。在野のキュレーターやギャラリスト仲間との共同企画も多く、「アートビジネスの資本は、ズバリ『人』」。たくさんのプロと接することで、見る目が養われるという。www.marinaro.biz

右 フラットな塗りに見えるアンソニー・イアコノの絵画《真紅の輝き》(2020)は、紙を貼り付けたコラージュ!(1,800〜12,000ドル)。下 玉虫色の奇妙なオブジェはグレイスリー・ローレンスによる3Dプリント《特別なハンガー》(2020)。これ一作で注目を集め、限定10点は完売(450〜500ドル)。

Lauren Marinaro
画廊オーナー/ ディレクター

2000年代の注目ディーラー、ザック・フォイヤーのもとで画廊経営を学び、2015年に独立。スタッフは2人ながら扱い作家は総勢17人。

2

版画や写真集、手の届く選択肢も用意

Lubov

ルボフ

有名コレクターが最初に買ったアートが、小さな版画だったという例は珍しくない。ルボフでは、10年ぶりのカムバックで注目を集める画家シャノン・カルティエ・ルーシーの話題作のいくつかを限定50点のプリント版で発表している。油彩画は2万ドル以上だけれど、このプリント版なら475ドル。また、ダンサーをモデルに女性の視線や身体を捉える写真作品で知られるジェンナ・ウェストラの「アフタヌーン」シリーズは、サイズにより1,200〜3,600ドル。限定500部の写真集なら30ドルだ。少しずつグレードアップしていくのも、アートを買う楽しみの一つ。www.lubov.nyc

上 ジェンナ・ウェストラの写真《水を通したレモンの眺め》(2020) 右奥 シャノン・カルティエ・ルーシーのちょっと不思議な絵画《新居》(2017) 右 二人展に登場したキアラ・イブラの素焼きの彫刻《チャンネル・メイス》(2021)もファンキーだ。

Francisco Correa Cordero
画廊オーナー/ ディレクター

展覧会企画の面白さにハマってスペースを持ったのが5年前。新人作家に初個展の機会を与える画廊としてアート界の信頼は厚い。

Artwork Images Courtesy the artists and Marinaro, New York
Courtesy the artists and Lubov, New York;
Portrait Photo KYUNGROC KIM

3

上 ウラジスラフ・マルコフの綿ジャージーに焼印の作品《燃焼(GSG)》《燃焼(is 15)》(2020)。右上 昨年秋の「ショーン・ドノヴァン:新作」展示風景から。右奥 画廊正面もアーティスティック。

コンセプチュアルな立体作品にじわじわとファン増加中

M23

エム23

「アンチ絵画ではないけれど、僕がフォーカスするのは新しい彫刻の形」と熱っぽく語るセオドア。中華街の雑多な通りの中、ひときわ目立つミニマルなスペースに、素材やプロセス重視の立体作品が並ぶ。この手のアートは一見難解なようでも、独特の美学を宿し、環境問題など身近なテーマを扱っている。コアな若手コレクターが増えているようだ。「自分が何が好きかを見極めるには、とにかく見て歩くこと。作品ばかりか作家を知ることも重要。どんなコンセプトを持ち、どの作家と一緒に展示しているか」。アートは一人では生まれない。作家同士の動きの中に見えてくるものもある。www.m23.co

Theodore Mauritz
画廊ディレクター

アートの仕事に就くために美術学校に通い、アーティストとともに学ぶ。常に作家目線の理論家で、話し出したら止まらない。

4

良質な展覧会に定評あり。日本人作家も紹介

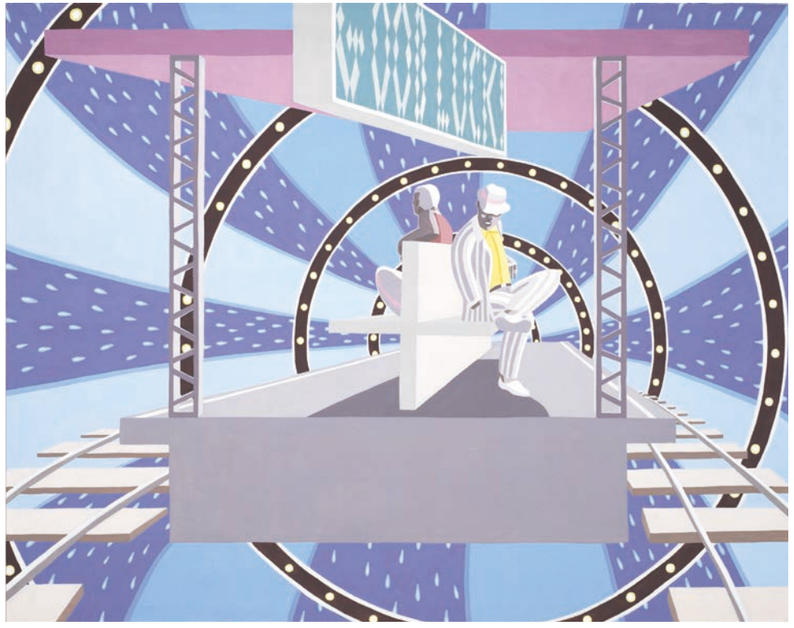
Bridget Donahue

ブリジット・ドナヒュー

作家サポートの意味では、海外で活躍する日本人にも注目したい。小島郷史(さとし)は、デュッセルドルフ芸術アカデミーに学び、かのイギリスのスター画家、ピーター・ドイグに師事した逸材だ。4年前のNYデビュー展では5,000〜7,000ドルで作品は完売。今回は8,000〜12,000ドルといまだ買いやすい価格帯となっている。「画廊はむやみに値段を上げるのではなく、美術館に作品を収めることが先決」。そう、美術館に収蔵されることで、作品の評価は跳ね上がる。逆に言えば、初心者コレクターはその前に買うことが大事。www.bridgetdonahue.nyc

Bridget Donahue
画廊オーナー

バワリー街のロフトに広がる斬新な展示は、アートメディアの注目の的。スタッフと2人だけのサロン風オフィスも近づきやすい。



上 オプアートの装飾性と寓意的な人物画の要素を合わせ持つ小島郷史の油彩画《パラレルライン》(2021)。右上 ファッションデザイナーとしても知られるスーザン・チャンチオロのドローイング《川下で、天使が地面すれすれに飛んでいる》(2019)

Artwork Images Courtesy the artists, M 2 3, New York; photo by SHARK SENESAC
Courtesy the artists and Bridget Donahue, NYC; photo by DARIO LASAGNI (Kojimas work);
Photo GREGORY CARIDEO (Ciancioloos work)

今最もハプニングなエリア「トゥーブリッジズ」を探訪!

パンデミックで閑散となった街で、新たなアートが芽吹き始めた場所がブルックリン橋とマンハッタン橋の巨大橋桁に挟まれた、通称「トゥーブリッジズ」。シーンを牽引するギャラリーの推し作品を拝見

チャイナタウンでアート巡り 通称「トゥーブリッジズ」で

新興のアートエリア

飲茶店のビル４階の「Lubov」
Photo by Manami Fujimori

「56ヘンリー」（左）と「ATM NYC」
Photo by Manami Fujimori

若手作家作品が並ぶ「M２３」
Courtesy M 2 3, New York

前身はホテルだった「Marinaro」
Courtesy Marinaro, New York

Srijon Chowdhury, *Moth on a Poppy*, 2021
Photo by Charles Benton
Courtesy Srijon Chowdhury and Foxy Production, New York

このところ毎日のように出かけている場所といえば、チャイナタウンである。ご本家のキャナルやモットストリート近辺ではなく、キャナル以南のバワリーやイーストブロードウェイ、その東のヘンリーストリート。実はこのあたり、いまもっとも注目のアートエリアなのだ。

ブルックリン橋とマンハッタン橋に挟まれた一角、通称「トゥーブリッジズ」には、現在、10軒近いギャラリーが集まっている。人気の飲茶店の上階にスペースを構える「ルボフ」や、洒落たカフェの隣に2軒長屋のように並ぶ「ＡＴＭ ＮＹＣ」と「56ヘンリー」。同じ通りの「Ｍ２３」も見逃せない。ミニマルなスペースに若手作家の難解（？）な作品が並び、画廊オーナーとついつい話し込んでしまう。

前身はホテル、それ以前は葬儀場だったという建物自体がユニークなのは、「マリナーロ」だ。地下の2フロアにも展示スペースが広がり、配管剥き出しの薄暗い空間はそれ自体がアートのよう。扱い作家の個展ほか、他の画廊や在野のキュレーターと共同で企画するグループ展など、仲間意識に溢れた展示もみどころだ。

ところで、昨年秋のオープン以来、このエリアの要となっている「ライルズ&キング」では、現在、美大生の卒業展「イン・プレイズ・オブ・シャドウズ」が開催中。イエール大学修士課程で絵画・版画を学んだ学生たちの作品展であり、すでにこの2月、キャンパス内で発表されていたが、より広い観客を求めての再登場となった。

興味深いのはそのタイトル。かの谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』の英訳本タイトルと同じとあって、いったいどんなオマージュ展なのか、楽しみに出かけたのだったが、察するところ、展示作品と谷崎美学の関連性は薄いようだった。とはいえ、本展を企画したエボニー・L・ヘインズは、大手デイヴィッド・ズワーナー画廊の初の黒人ディレクターとして今もっとも注目の人。この秋から、ズワーナー傘下の新スペースを取り仕切ることが決まっている。

一方、このエリアでは先輩格の「フォクシー・プロダクション」は、5年前にチェルシーから移転。広々としたスペースの中、毎回、手堅い個展や企画展が続き、今夏一押しの作家展は、スリジョン・チャウダリー（1987年生）の新作絵画である。妖艶かつ色鮮やかな花の絵。が、画面のそこここに人物や人体の一部が紛れ込み、寓意画的な幻想世界を紡いでいる。人生や時の儚さに通じる画題という意味では、この1年のコロナ禍を思わずにはいられない。

チャウダリーは、バングラデシュの出身で、11歳のとき家族でアメリカに移住。父親が首都ダッカで画廊を経営していたため、子供の頃から西洋画に親しみ、19世紀末フランスの象徴主義に関心があるとも語っている。なるほど、当時の画家オディロン・ルドンやギュスターブ・モローに重なる内省的な絵画世界。写実を超える色の選択も独特だ。

この色彩については、古代インド発祥の考え方であるチャクラの7色と関連があるらしい。チャクラとは、人の生命力の源となる身体の7つの部位のことであり、いわばエネルギーの出入り口。それぞれに呼応する色があるという。実際、「ケシに群がる蛾」の真紅や「タンポポの歌」の青など、色自体の強さと深みが圧巻だ。

アートを見るとは、かように文化や思想に目を開かれることと。とりわけ、ここ新興エリアに集まるギャラリーは小規模で、画廊オーナー自ら相手をしてくれる。アート談義に花が咲き、帰り道、チャイナタウンで買い物する楽しみもある。この春は、大手スーパーに採れたての筍が並んでいた。冬には露店に干し柿を見つけて買い込んだ。美と食が共存する、ニューヨークならではのアート巡りである。

（藤森愛実）

In Praise of Shadows
■ 7月2日（金）まで
■会場：Lyles & King
■ 21 Catharine St.
■ www.lylesandking.com

Srijon Chowdhury: Dandelion Song, 2021
■ 7月30日（金）まで
■会場：Foxy Production
2 East Broadway, #200
■ www.foxyproduction.com

● **Lubov** @ 5 East Broadway, #402
www.lubov.nyc
● **ATM NYC** @ 54 Henry St.
www.atmgallery.nyc
● **56 Henry** @ 56 Henry St.
www.56henry.nyc
● **M２３** @ 24 Henry St.
www.m23.co
● **Marinaro** @ 1 Oliver St.
www.marinaro.biz